

『弱い時にこそ強い』 コリント人への手紙第二 12章1～10節 2016.8.21(聖日礼拝説教より)

『主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われた…。』 IIコリント12:9

◆パウロは「弱さを誇る」と言う。人生の弱さや苦悩にも関わらず、逆に堂々と力強く生きられるのか？パウロはその確信を得る前、文字通り天にも昇る霊的体験をした(12:2～4)。その至福の世界から目覚めた現実は、「肉体のとげ/サタンの使い…侮辱・苦痛・迫害・困難…(7～10 節)」に満ちていた。「とげ」とは、無理やり神から負わされた人生の重荷！しかし私たちは、災いも幸せも、全て神の許可のもとに受け、その理由も目的も神がお持ちだと信じる！

◆パウロは「激痛のとげ」を負わされた時、まず主に祈った…「このとげを取ってください(8節)」と。私たちは、苦難の日に、まず主を呼ぶ！「辛いです、不安です…助けてください！」と。神の子は、その叫びの中で御旨を知る。パウロは『(苦難は)高ぶらないためにある(7～8 節)』と悟った。人生の苦難は、私たちの傲慢を打ち砕くもの！それ故、その苦痛が取り除かれないのは、私たちの傲慢がなかなか消えることがないからかも。CS ルイスは言う…「傲慢は、地獄から直接私たちの心に入り込み、神に反抗し、あらゆる悪徳を導き出す、その致命的で最悪の中の最悪の罪は、敬虔で真面目な信仰者の心にどっかりと腰をおろす」と。

◆NHK スペシャル『二人の贖罪』は、真珠湾攻撃を指揮した淵田氏と、その報復爆撃を志願し実行したディエゴ・氏の二人が、その激しい憎悪を、どのように赦しに変えられ、償いの人生を送ったかを克明に描いた。二人は奇しくも同じ、十字架の主の言葉『父よ、彼らを赦し給え。その為す処を知らざればなり』で傲慢な憎しみを砕かれた。「自分の罪(傲慢)」を認めて神の赦しを乞う者は、憎しみから解放され心に平和を宿す。

◆パウロは「主に」祈り、「主の」言葉を聞いた『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである(9 節)』と。わたしがあなたと共にいる。それで十分ではないのか？と。世に生まれ、十字架にかかられた方が力を下さる。私が強くなるのではなく、共におられる方が、私の弱さを思いやり、圧倒的な力を発揮される。謙虚に弱さを認め、素直に助けを求める人を神は憐れみ、全力で助けて下さる！

★弱さに悩む時こそ主に信頼し、御前に祈り、その圧倒的な力を注いでいただこう！